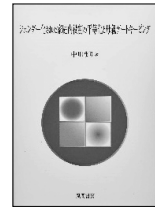


中川 まり 著

『ジェンダー化された家庭内役割の平等化と  
母親ゲートキーピング』

(風間書房、2021年11月 263頁)

三具 淳子



女性の就業が進んだ現在においてもなお家庭内の役割は女性に大きく偏っている。著者は、日本の家族における性別役割分業をいかにして平等化していくのかという問題に取り組み、男性の育児・子育て・家事参加要因の包括的解明を目指す。方法は12歳以下の子どもをもつ男女を対象とした多様な調査データの分析による。

本書を特徴づけるのは、その際に、男性の家事・育児参加を促進あるいは抑制するゲートキーパーとして女性とそのカギを握っている可能性に注目した点である。女性が性別役割分業についてどのような意識をもっているのか、そして、どのような実践を行っているのか、それらと男性の意識・行動はどのように関連しているのか等、分析がそれらを次々に明らかにしていく。

本書は、序章、1～12章、終章から構成されている。簡単に内容を紹介しよう。序章「日本型近代家族における性別役割分業と男女の働き方」では、日本のジェンダー化された家庭内役割と職場の現状が示され、平等化のための要因解明が本書の目的として位置づけられる。

第1章「夫婦の性別役割分業に関する社会学的研究の展開」では、先行研究において、性別役割分業意識が家庭内労働の分担にもたらす影響は男女で異なること、および、性別役割分業に起因する男性側の負の側面や女性が男性に家庭内労働に参加を促す実践に関する研究が欠落していることが指摘される。

第2章「家族のジェンダー研究における理論的枠組み」では、父親の育児・子育て・家事参加に関する包括的要因の基本概念および理論を整理し、これらを援用して母親ゲートキーピング仮説を中心とした本書の研究仮説が示される。

第3章「母親の家庭役割と就業、母親ゲートキーピング研究の展開」においては、性別役割分業下における子育て期の母親の問題に関する先行研究を概観する。ここで著者は、母親ゲートキーピングを「母親が子育て期の父親の育児・家事参加を促進もしくは、母親自身が家事や育児を多く行うために夫の育児・家事参加を抑制してしまうこと」と定義(P.62)する。

第4章「母親の雇用形態と父親に対する家事参加の促進」、第5章「妻の家庭責任意識と父親の育児・家事参加」においては、子育て期の母親を分析対象として、それぞれ母親のゲートキーパーとしての促進および抑制作用を実証・考察する。

第6章「父親の育児・家事参加に関する社会学的研究の展開」では、父親の育児・家事参加の規定要因に関する研究背景を探り、第7章「父親は母親ゲートキーピングをどうとらえるのか：データと分析方法」において、これを検討するためのデータとその分析方法が述べられる。

第8章「分析1：母親ゲートキーピングを父親はどう受け取るのか」、第9章「分析2：父親の収入による育児・家事参加要因の相違」において、父親に対する母親の家庭内役割分担期待を認識することで父親の育児・家事参加が促進されること、しかし、父親の収入によってその現れ方には違いが生じることが明らかにされる。

第10章「父親データの分析結果に対する理論の検討」では、上記2つの章の分析結果から、父親が母親からの期待を自覚するのは、母親の学歴の高さ、末子年齢の低さ、および母親の収入の多さによることが示される。

補論として以下の2つの章が続く。第11章「外部サポートの利用と夫の育児・家事参加」では、外部サポートの利用によって父親と母親の家事・育児の遂行頻度が変化することはなく、有償の外部サポート利用は夫婦の収入状況に依存し、夫の性別役割分業意識は夫自身と妻の家事遂行に強い関連性を持つことが示された。

第12章「夫のワーク・ファミリー・コンフリクトと妻の相対的資源」では、妻の収入割合が多いほど、夫の性別役割分業意識はより非伝統的になり、それによって夫のワーク・ファミリー・コンフリクト（WFC）が低くなることが明らかにされた。

終章「ジェンダー化された家庭内役割のゆくえ」では、本研究を通して、女性がゲートキーパーとして男性の家事・育児参加を促進することが示されたが、一方でこれとは反対に「女性も家庭役割を固守しているか、もしくは移譲できない」（P.226）現状も明らかにされた。

本書をとおして伝わってくるのは、家庭内役割における男女の不平等を改善する手立てを模索する著者の熱意である。これまで数多の研究者により家庭内役割の不均衡を是正するポイントが示されており、すでに検討され尽くした感があった。そこで指摘されてきたことの多くは、労働環境など家庭外の社会的要因や規範、本人の資源等であったが、著者は先行研究の精査から「母親が父親の家事・育児参加をいかに媒介するかについての研究がない」（p.221）ことにたどり着く。そして、複雑に絡み合った諸要因を解きほぐし、個人レベルにおいて女性（母親）のゲートキーパーとしての働きが家庭内役割の平等化を左右することを実証し、新たな知見を積み重ねた。

男性に対する女性の働きかけが重要であり、また、女性が育児や家事の囲い込みを自省しこれを手放していくことによって、男性が家事・育児を担うチャンスを広げていくことができる。夫婦を平等化へのレールに導いていくには、女性の主体的な日々の実践が有効であるという本書のメッセージを多くの女性は心に留めておいて欲しい。待っているだけでは変わらないのだ。

（さんぐ じゅんこ 跡見学園女子大学非常勤講師）